

能舞台活用・伝統芸能による地域活性化に関する調査研究- I -佐渡羽茂小泊集落の能に対する意識調査-

Study on regional revitalization through enhanced utilization of Noh stage and
traditional performing arts -village awareness survey on Noh -

藤田 晴啓 岡崎 一也

Fujita Haruhiro Okazaki Kazuya

研究の背景：新潟国際大学藤田晴啓研究室では 2012 年に開催された佐渡市主催政策提言コンペに「大学と協働する能舞台活用事業案」を提言した。それ以来毎年秋、村で催される薪能イベントに学生および教員が能舞台清掃、準備、片付け、演能に参加し、2014 年からは能の演目にあわせたデジタルコンテンツによる視覚効果を表現している。本論文は 2013 年「大学生の力を活かした集落活性化事業」として新潟県から調査業務委託を受け、「能に対する意識調査」を集落世帯対象に行い、結果をとりまとめて新潟県に提出した未公開の報告書を論文として再編したものである。

キーワード：能舞台，薪能，伝統芸能，村民意識調査

I 集落における能の現状

佐渡の能舞台は、集落単位での能の研鑽と奉納能という、全国でも例をみない稲作に由来する伝統文化を支えてきたが、佐渡全体として能楽後継者の減少により現在は定式能あるいは薪能として定期的に演能される以外では、使用頻度は非常に少ない。また、島内のいくつかの能舞台は定期的な演能で多くの観客を集めているが、全体的には極少数である。

羽茂小泊白山神社の能舞台では、昭和年間まで集落の能楽への関心は非常に高く毎年薪能が奉納されていたが、昭和 52 年を最後に村自身での演能は途絶えた。他の集落同様に現在では、村社祭事に演能を行うには、佐渡市内に複数存在する演能同好会に依頼するのが現状である（注：2013 年当時。2014 年以降は佐渡出身能楽師の協力で演能が現在まで続いている）。佐渡市は小泊白山神社能舞台の調査を行い、市の有形文化財に指定するとともに、文化財修復保存事業の一環として、平成 24 年 3 月に朽果てた屋根部分を中心に修復補修工事が完了し、同年 6 月には柿落としての記念事業も開催された。能楽後継者は平成 24 年の時点で小泊集落にはひとりであったが、平成 26 年 3 月現在では、成人では笛および謡が参加し、合計 3 名となっている。さらに、小泊で年 5 回程実施している笛講座に参加する、学生や成人 4 名を含めると、以前より参加人数は確実に増えている。

新潟国際情報大学は羽茂小泊活性化友の会との交流を通じ、「能による村活性化ボランティア」を募集し、教員指導のもと、ボランティア学生は平成 24 年度から日々能楽の練習をしており、学生・教員有志が能楽を研修し、村民の一員として村自力での演能復活に向けた支援活動を平成 24 年から開始しており、小泊集落における村民との合同練習、秋の小泊白山神社大祭奉納能他集落の行事に参加している（注：能ボランティアは平成 28 年に終了）。このような学生が主体となるモデル事業を発展させ、地元能楽団体とも協力し、集落単位での演能を復活させるとともに、県内外での公演学習会も実施し、佐渡伝統芸能振興による観光・交流人口増加と地域活性化をさぐるには、集落における能、能舞台の活用、そして活性化に関する意識調査を実施することが不可欠である。

II 調査の目的

平成 25 年度の本調査では、小泊集落の世帯毎の家族構成（血縁および年齢）の概況を把握すること、および各世帯で現在能に関わっているか、あるいは過去に関わった家族の存在を情報として収集した。さらに、能に対する現在の住人の関心度合い、さらには集落活性化に能舞台をどのように利活用すればよいかなどの村民の意識を調査した。この調査によって、現在の集落が持つ能舞台の位置づけ、および将来にわたって集落活性化をどのように考えているか等を明らかにすることを目的とした。

III 調査スケジュール：本集落調査スケジュールは以下のとおりである。

平成 25 年 7 月 20 日：集落役員会における調査依頼および検討

平成 25 年 8 月 20 日：集落回覧として調査票配布、総代から回答依頼

平成 25 年 8 月 30 日：班内回収締め切り日

平成 25 年 8 月 31 日：回答依頼（総代）

平成 25 年 9 月 3 日：本学の調査票回収およびお礼

平成 25 年 10 月 13 日：未回収世帯向けの回答お願い

平成 25 年 11 月 23 日：個別聞き取り調査（2名）

IV 調査方法

IV-1 事前協議

平成 25 年 7 月の小泊集落代表者会議において 8 月に実施する世帯調査の目的、方法を説明し、具体的な調査票を提示して同意を得るとともに、各委員から意見をもとめた。また、出された意見は調査票質問に反映させた。以下に会議にて出された意見を列記する。

- 1 世帯調査とあるが、回答者は世帯の誰とするのか？
(回答：できる限り家族で協議して回答いただきたい)
- 2 年齢は実年齢でなくても、いいのでは？
(回答：実年齢記入あるいは階級年齢から選択するという方式とした)
- 3 世帯の個人情報保護できるのか？
(回答：無記名回答とし、調査票の扱いには十分に注意を払う)



写真1 集落役員会での質問調査に関する説明（平成25年7月20日）

IV-2 本調査

平成25年8月20日に集落回覧配布物として、集落全85世帯に質問票を班毎に配布した。集落総代の質問調査に関する協力依頼文書を添付した。回答期日は8月30日とし、各班内で回収してもらうとともに、9月2日の現地調査において、各班から合計49世帯分の調査票を回収した。そのうち集計に使うことのできる有効回答は38あった。質問項目の内容は以下のとおりである。尚、実際に使用された質問調査票は、本報告書の末尾に添付した。質問の内容は、家族構成と年齢（実年齢あるいは年齢層）、能を習っていた家族の有無と年齢、能舞台使用および伝統芸能による地域可能性に関する質問であった。

- ①家族構成
- ②過去に能を習っていた際の年齢
- ③テレビが家庭に導入された時期
- ④能舞台を能以外で使いたいのか
- ⑤能舞台を能以外で使いたいのか
- ⑥伝統芸能で地域活性化は可能か

IV-2-1 家族構成

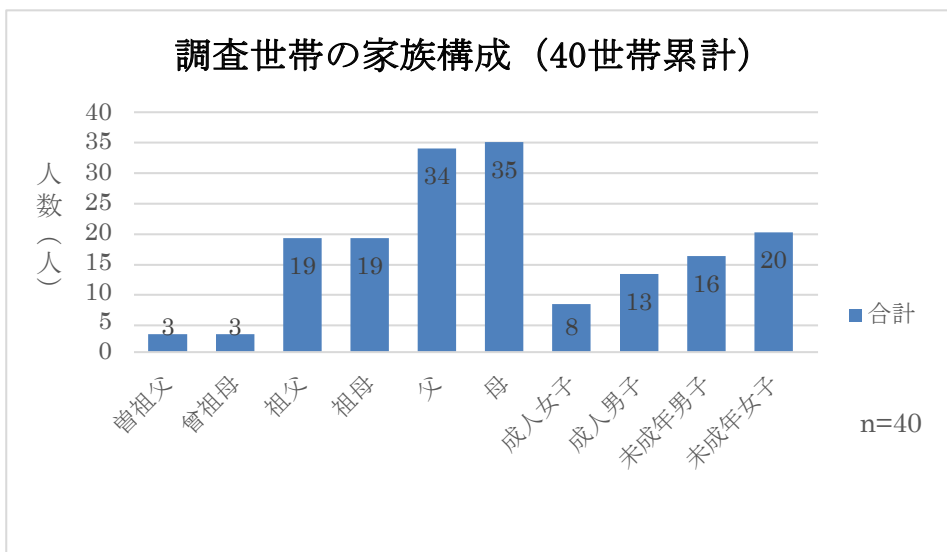


図1 調査世帯の家族構成 (40 世帯累計)

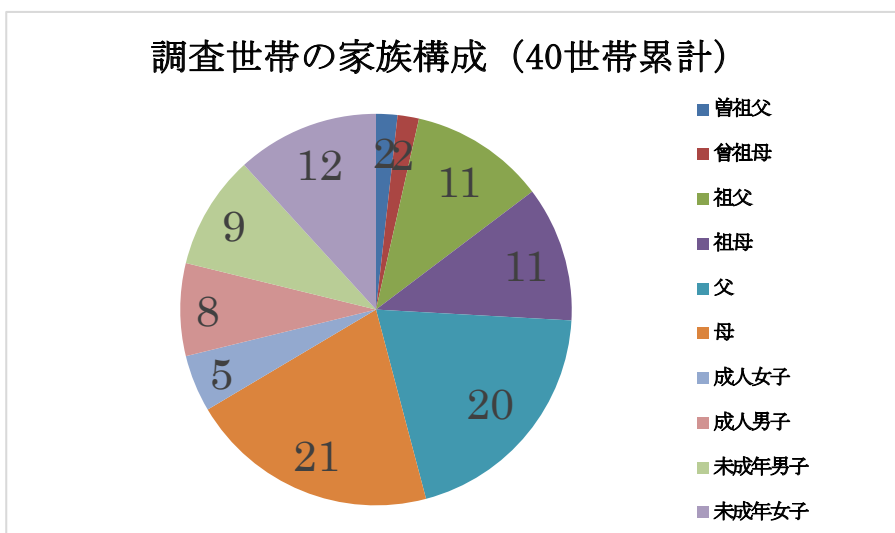


図2 調査世帯の家族構成 (40 世帯累計)

図1は有効回答 40 世帯の家族構成を合計して、ヒストグラムとして表したものである。図2は 40 世帯全体の家族構成を合計したものから、祖父母父母等の家族構成員が集落全体に占める割合を表したものである。家族構成は曾祖父母が全体の 4%。祖父母が 22%。父母が 41%。成人男子および成人女子とは未婚の成人同居家族のことであり 13%であった。未成年の男女子は 21%だった。祖父祖母と父母が全体の 3分の2 近くを占めており、逆に未成年の男子女子は全体の 21%と若者が少ない事実が伺える。尚、家族人数を世帯数で割った平均家族構成人数は 4.2 人であった。家族構成の実数を表すヒストグラムでは、最も多かったのは、父および母であり、それぞれ 34 名および 35 名であった。

IV-2-2 家族の年齢構造

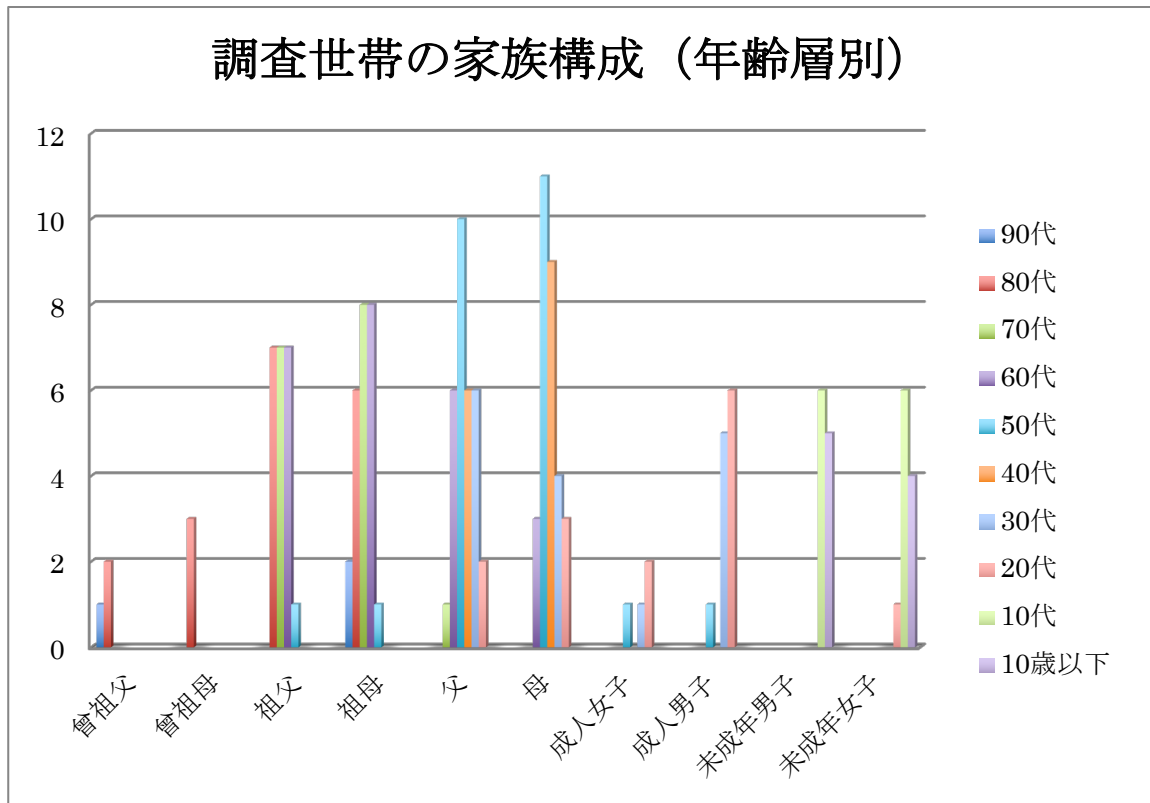


図3 家族の年齢構造（有効回答数：38世帯）

図3は現在の家族構成を年齢別（10歳おき）に棒グラフ化している。祖父祖母は60～80代が多くを占めていた。父母の年齢構造は50代が最も多いもの、60代、40代、30代もみられ、年齢の広がりを示している。同居成人男性では30代、20代が同居成人女子よりも多くみられた。未成年の男子女子合わせても平均子ども数は世帯あたり0.58人と全体での子どもは少ない。

IV-2-3 家族構成別世帯数

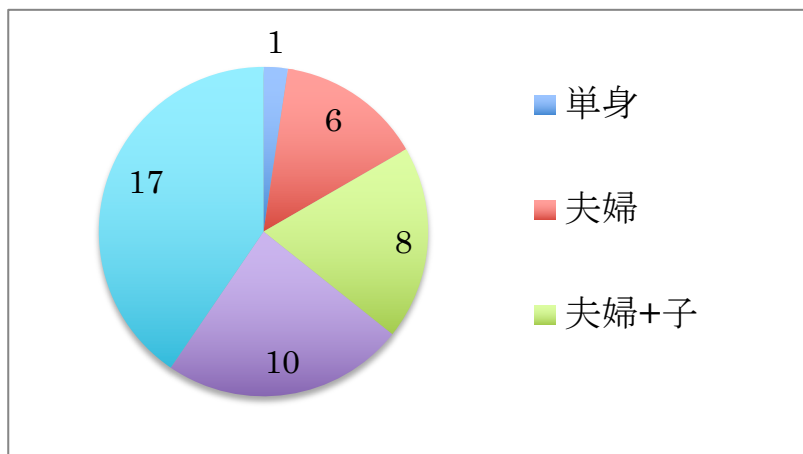


図4 家族構成別世帯数

図 4 は有効回答 42 世帯の家族構成別の世帯数を表したものである。単身世帯は 1 戸、夫婦のみの世帯は 6 戸、夫婦に子どもがいる世帯は 8 戸、祖母と夫婦の世帯は 10 戸であった。3 世代世帯が最も多く、17 戸であった。

IV-2-4 テレビの導入時期

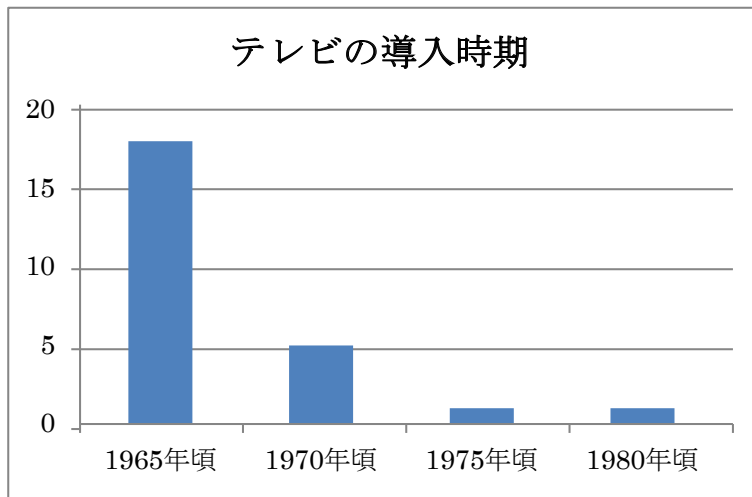


図 4 テレビの導入時期（有効回答数：25 世帯）

図 4 は家庭にテレビが導入された年代をグラフ化したものである。1960 年頃に購入した家庭は 18 世帯。1970 年頃に購入した家庭は 5 世帯。1975 年頃および 1980 年頃では各 1 世帯であった。

IV-2-5 能舞台の能以外での使用希望

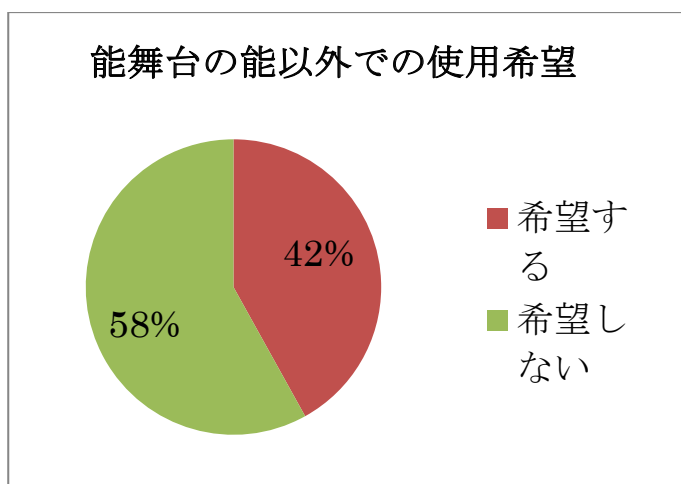


図 5 能舞台の演能以外での使用に関する意識

図 5 は能舞台を能以外に使用する希望者割合である。42%の世帯は能以外の使用に関して肯定的な考えを持っていたが、58%は否定的な意見を持っていることが明らかとなった。

IV-2-6 能舞台を能以外で使用した事実の認知

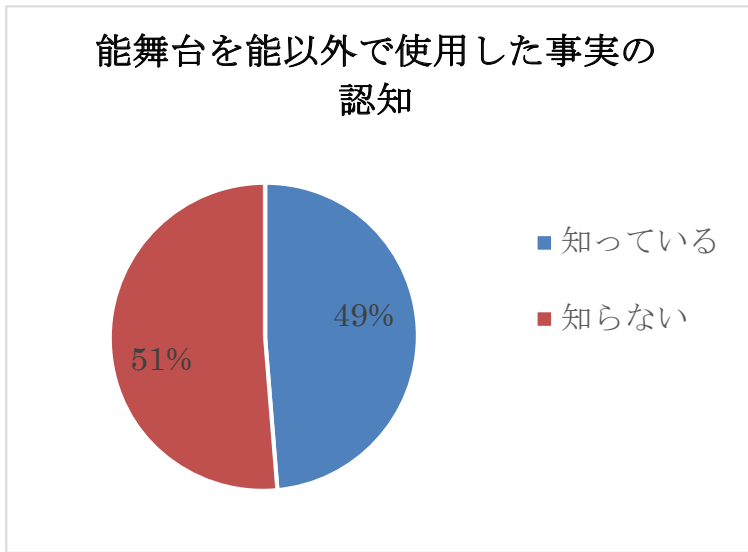


図7 能舞台を能以外で過去に使用されたことへの認知度

図7は過去に小泊白山神社で祭りや行事などで能舞台を能以外で使用されたことに関する認知度の結果である。知っている世帯および知らない世帯はほぼ同様の割合となった。

IV-2-7 伝統芸能による地域活性化可能性への意見

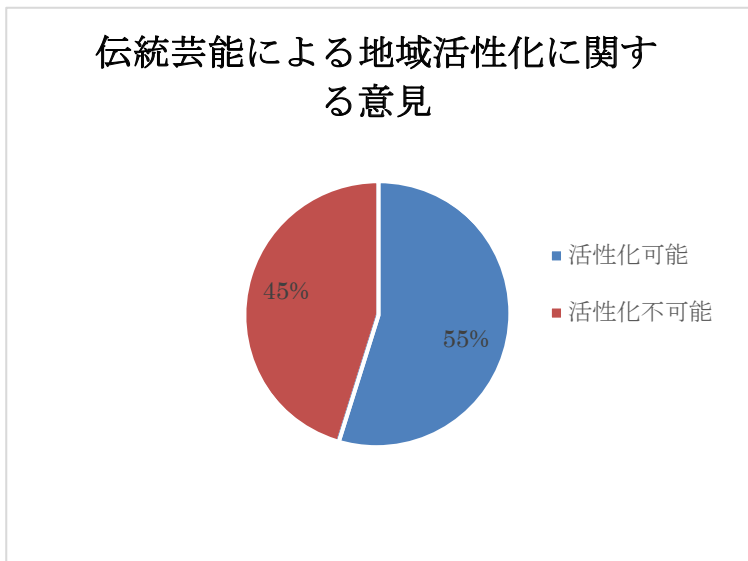


図8 伝統芸能による地域活性化の可能性に関する意見

図 8 は伝統芸能による地域活性化について可能性に関する意見の調査結果である。可能だと答えた人は全体の 55%であり、活性化は不可能と回答した 45%となった。

本調査では「伝統芸能によって地域が活性化すると思うか？」に対して「はい」あるいは「いいえ」を選択した回答者のその理由としてあげられた自由記述を以下に列挙する。

「はい」と答えた人の意見

- ① 継承者が増えれば
- ② 生活の中の行事で何かやる
- ③ 地域の人にかかわる
- ④ 定期化、環境設備補強（トイレなど）
- ⑤ 他地域との交流など
- ⑥ 小泊祭などに使用したい
- ⑦ 演能者しか楽しめてないと考えあらずじなど分かりやすい説明が必要
- ⑧ 人が（能舞台に）寄り付くことが大事
- ⑨ 若い人からお年寄りに声をかける
- ⑩ 芸能を伝承できれば
- ⑪ 人々との繋がり次第
- ⑫ 何事も人が集まる場があればそれをきっかけに活性化へつながる

「いいえ」と答えた人の意見

- ① 伝統芸能に興味ない人には関係ない
- ② 小泊に伝統芸能はない
- ③ 周囲にそういった興味を持つ人がいない
- ④ お客様を呼ぶ努力、体制、心構えが必要
- ⑤ 興味を持っている人が少ない
- ⑥ 生活があるから
- ⑦ 反対者が多すぎる
- ⑧ トイレ等がない
- ⑨ 関心がない
- ⑩ 能を見る人が少ない
- ⑪ 一部の人だけで行っている
- ⑫ 伝統芸能だけでは足りない

質問「能舞台を演能以外で使いたいのか？」にて「はい」と答えた者のうち、「何に利用したいか？」に記述した内容。

- ・舞台での披露宴（子どもによるものでも可）
- ・演奏
- ・地域のお祭り
- ・何でもいい
- ・盆踊りとか
- ・映画のスクリーン
- ・踊り

質問「能舞台を演能以外で使われた例を知っているか？小泊以外の例も含める」にて「はい」と答えた者の、記述内容。

- ・小泊まつりの余興で
- ・昭和 30 年代に旅芸人一座の芸居
- ・青年芝居などの祭り、イベント、祭の余興
- ・昭和 40 年代に～50 年代に青年や若妻の会
- ・祭りやイベント
- ・小泊の祭りで歌や踊り
- ・演奏会
- ・昭和 46 年に白山神社で青年会による芸能大会 10～20 年ぐらい続いた
- ・大学生研修や合宿
- ・祭りの余興で芝居、踊り、映画など
- ・年配者から昔の小泊の様子を聴き歴史をする
- ・芝居
- ・杠祭り
- ・カラオケ

IV-2-8 集落活性化のアイデア

質問「その他能楽等伝統芸能や能舞台にかかわらず集落を活性化できるアイデア」における自由記述では以下の具体的な記述が回答された。

- ・芝居
- ・集落にいる人全員が参加できて老人が生きていくことに必要な仕組み
- ・昔と違って継対会の繋がりが大きくなっているので、集落の中の横の繋がりが重要

- ・ 大学など活用してくれる団体と協力して何か行う
- ・ 限界集落を維持することが先決
- ・ 自由参加のサークルなど
- ・ 定期的にイベントを開催
- ・ 映画など作成
- ・ 素浜の夕焼けを利用して伝統芸能+イベントなど
- ・ 巨大太鼓を作り子童より指導を受け大人、子供、老人で集い遊ぶ
- ・ 部落で集まって大きな行事を行う
- ・ 野外ステージとして能舞台の活用許可を出す

IV-2-9 その他大学生による集落活性化活動



写真2 集落長老への集落歴史に関する聞き取り調査（本学小泊活性化交流事業）

写真2は本事業の集落調査ではないが、小泊集落を活性化させることを最終目標に据える本学佐渡プロジェクト事業において、合宿を行い、神屋勇氏から集落の歴史、能に関する聞き取りを行った場面である。神屋勇氏は JA 羽茂の支所長を長年務め集落の能に関する関与、集落の近代における歴史に関して、詳細な説明をいただいた。



写真3 岡崎實氏の佐渡古文書に関する講演（本学小泊活性化交流事業）



写真4 個別聞き取り調査後の交流会（平成25年11月23日ふすべ村にて）

岡崎實氏は、書家でもあり、羽茂あるいは佐渡に残されている文書の解読に大きな貢献をされている。本学事業では佐渡の過去の歴史に関して講義を行っていただいた（写真3）。

さらに、平成25年11月23日には岡崎トモエ政調会長（写真4の手前女性）、前調整会長である長橋氏さらに佐々木キヨシ氏に、個別聞き取り調査を実施した。小泊の歴史や実際の体験、今日との環境の違いについて話をうかがった。子供の頃学校の授業で能が行われており、そのため少なくとも昭和7年前後の人たちの多くが歌詞の意味を理解し謡っていたことや、当時娯楽として舞や芝居と俳句、歌その他にも多くの娯楽があったということであった。

V 考察

羽茂小泊で実際に能楽が普及したのは、挽き臼の生産輸出で財を成した、岡崎氏が小泊白山神社に能舞台を建立し、村民あげて能楽を学んだ明治時代にさかのぼる。一時能はすたれたものの、戦後は東京で食糧難が起きたため物資の豊かな佐渡に東京の能楽師たちが多く流れ込んだことにより、能が一時的に活性化された。このことから戦後最も能が栄えたのは昭和 21 年から 23 年ごろだと考えられ、それからは徐々に衰退していったと思われる。

V-2 意識調査

能に関する意識調査から分析した結果、集落における演能の終盤期であった昭和 50 年代から年月が大きく経っており、その当時演能に携わった集落住民は皆他界しており、わずかに当時の演能の様子を記憶している方が数名いるだけであった。意識調査を実施する前は、過去盛んであった能が廃れた原因は新たな娯楽としてテレビ導入によるものと推古したが、25 世帯中 18 世帯は昭和 35 年から 45 年までの年代に購入しており、最後の演能が行われた昭和 52 年とずれること、さらに後述するようにテレビ導入時期でも他に多くの娯楽があったことから、テレビ導入が直接の因果関係は存在しないと考えられる。

能舞台を能以外で使用することは、修復した能舞台の有効活用となるが、伝統芸能の舞台を他の行事や目的で使用することに調査結果から、本来の目的以外での使用には抵抗がある人が半数以上存在している事実が浮かび上がった。過去に能舞台を他の目的（地域の行事など）で使用していたことを知っているか、あるいは知らないかにより能舞台を使用することに意識は左右されるかもしれない。

そこで、能以外での能舞台使用に関する希望および過去に能以外の使途で使用した事実を認識していたかの両者に因果関係がないかを検証するために、クロス表を作成し、表 1 に示した。それぞれ独立した質問へは、前者は希望 42%、希望しないは 58%あったが下記の結果だと、それぞれ 36%および 64%となり、希望が減少する。これは、前者の質問には答えたが、後者の質問に答えていない世帯が存在することによる。

		能舞台の能以外での使用希望	
		希望する	希望しない
能舞台の過去能以外での使用認知	知っている	8	10
	知らない	4	11

表 1 能舞台の能以外での使用の事実認知および使用希望

クロス集計表および独立性の検定（ χ^2 検定）からは、能舞台が過去に能以外で使用されたことの認知および能以外での使用希望間には相互の影響は見いだすことはできなかった。

佐渡は過疎化が進んでおり、一方それに対する活性化策の一環として佐渡の各地で若い世代が中心となって伝統芸能の普及継承を促進している。調査に回答した過半数の世帯は伝統芸能での活性化の実現に肯定的な考えを持つ。「いいえ」と答えた伝統芸能による地域活性化に可能性を見出さない世帯は「若い世代には興味を持たれない」および「伝統芸能だけでは効果は薄いのでその他にも何か必要」との意見によるものである。

肯定的に回答した世帯の多くは能自体の活性化というより、能舞台を通して地域活性化ができればと考えてくれている意見が多かった。従って、肯定的および否定的に回答した世帯の考えを合わせると、「伝統芸能だけでは若い世代の興味を引くことは難しいので、能舞台の利用を一般的な催しに広げることにより、集落活性化の可能性もありうる」という考えが多く世帯を代表することになる。

前述のとおり、小泊集落において過去の能楽をよく知る3人の方々への聞き取り調査では、子供の頃学校の授業で能が行われており（何時頃まで実施されていたかが不詳）、少なくとも昭和7年前後の人たちの多くが歌詞の意味を理解し謡っていたとのことであった。昭和7年生の方々には平成26年には82歳となられ、本調査の家族構成に占める割合は少ない。しかしながら、本調査の能の体験に関する質問が80歳以上の高齢者に直接問われたと考えられる世帯が少なかったと推定され、能体験者は80歳以上の高齢者ではひとりだけという結果になったと考えられる。当時娯楽として舞や芝居と俳句、歌その他にも多くの娯楽があり、テレビが普及したことにより多少の変化はあったと考えられるが、このことが能衰退の直接の理由ではないと考えられる。また上記の3名の方々によると、約20年前（平成6年頃）には能をやっている人が舞台上で披露する際はその親戚の方を必ず呼んでいたが、今日では逆に親戚を呼ぶことが恥ずかしいといった風潮があるということであった。そのため、以前に比べ能を見に来る人が減ってしまったと推測される。そのことにより能人口が減少したとも考えられる。毎年少なくとも1回の祭礼では、小泊だけではなく近隣の集落では青年会による祭り太鼓を行い、全家を歩き回っている（毎年6月に行われる羽茂本郷の「羽茂祭り」は特にその規模が大きい）。佐渡市が後押しを行い、全集落が協力して地域を盛り上げようと活動している。若い人が本土に移り、過疎化が起こりその中でも佐渡にいる若い人たちが中心に故郷のために地域活性化のために佐渡全体に活気を与えようと努力しているのが、現状である。

V-3 集落活性化への提言

以上の調査結果をふまえ、能舞台の能以外での使用が集落活性化のひとつの手だてとなると考えられる。意識調査では「能舞台の能以外での利用」には 58%の世帯が否定的であった。ところが、回答した世帯の半数は過去に小泊白山神社の能舞台が「能以外の出し物に多く使われていた」という事実を知らない。さらに、54%の世帯は「伝統芸能で集落活性化は可能である」と考えており、集落内での能舞台利用に関する説明等で能舞台の能以外での利用の可能性は大いに存在すると考えられる。つまり、半数の「能舞台が能以外の出し物に多く使われていた」という事実を知らない世帯に、丁寧に能舞台の有効利用を説明することにより、能舞台の能以外で利用に賛同する村民は増えるものと考えられる。

能舞台という歴史を感じさせる場で、祭り太鼓や新しい音楽、舞踏、劇等さまざまなアトラクションが地域活性化の原動力となるのではないかと考える。佐渡と本土を比較して、唯一おおきな違いは、佐渡には多くの集落に能舞台があるという、厳然たる事実である。これを、活用することにより、本土ではできないイベントやアトラクションが開催できる。佐渡全体の各集落で能舞台を活用したイベントをある時期に開催すると、観光客はそれぞれの集落をまわり、集落毎の出しものを楽しむことが可能となる。新潟国際情報大学では来年度はプロジェクションマッピングと能の演奏を掛け合わせた試みを予定している。

佐渡には 35 もの能舞台が存在し（注:2013 年当時）、多くの集落は羽茂小泊と同じく、能楽の継承が途絶えており独自の演能はできない状態にある。本事業では羽茂小泊活性化友の会と連携して、住民の意識に関する調査を実施したが、同様に能舞台を持つ多くの佐渡集落に適用することが可能である。

佐渡内で集落の能舞台を活用することにより、多くの集客を生み、集落の活性化を推進する道筋を作ることになる。地元複数存在する能楽団体および伝統芸能伝承 NPO の協力のもと、能舞台の活用が佐渡全体の事業に拡大すれば、絶大な波及効果が期待される。佐渡全体が「能舞台の島」としてかつてのにぎわいを復活させ、多くの観光等交流人口の増加、関連産業の振興という流れを作ることが期待される。

佐渡市では、交流人口の拡大を目指した、佐渡の能舞台を利用した大学の能合宿を誘致する事業も実施されており、本調査の内容は佐渡市との政策と一致する。さらに、本事業はこの能合宿事業の趣旨をさらに発展させ、新潟県と協働で集落独自の演能復活を目的としているので、佐渡能舞台の活用のみならず、大学教員および学生が村民として集落独自の演能をお手伝いすることにより、人的交流を介し地域活性化につながる大きな効果が期待できる。

V-4 今後の課題

80 代の高齢者は小泊集落にお住まいではあるが、本調査では過去の小学校で謡を教えていたという結果は得られなかった。10 月に実施される敬老会における個別聞き取りが必要である。さらに、集落内でも鬼太鼓を筆頭とする芸能継承に携わっている若い世代も少なくないことから、これらの方々への個別意識調査も必要と考えられ、今後の課題となる。

謝辞 本事業は新潟県「大学生の力による集落活性委託事業」により、調査を行い、集落の概況と伝統芸能に関する意識、さらには集落活性化への糸口を提案することが可能となった。また、小泊集落総代はじめ各役員、小泊活性化友の会には調査に多大なご協力を得ることができた。ここに謝意を表するものである。

参考文献

- i) 能の島・佐渡 佐渡観光協会 <http://www.visitsado.com/00sp/1104/noul.shtml>
- ii) 小田善正, 2008 年, 佐渡の能楽をささえた人々, 宇治一夫, 英宝社
- iii) 佐渡市教育委員会, 2008 年佐渡能楽史序説-現存能舞台三五棟

添付資料：意識調査依頼状と質問項目

能に対する意識調査

新潟国際情報大学情報文化学部の藤田研究室です。能の合宿ではいつも大変お世話になっております。私どもは新潟県の集落活性化事業の一環として、能に代表される伝統芸能による地域活性化を模索しています。そこで皆様方が能に対してどのように関わっているか、どういった意識があるのか調査が必要となりましたので、アンケート調査を小泊地区全戸で実施させていただくことになりました。本調査は新潟県との契約で添付の「個人情報取扱特記事項」の遵守が義務づけられており、個別のデータは一切公表いたしません。本調査の分析結果は、小泊地区全体像として報告いたします。お忙しい中、大変恐縮ですが、本調査にご協力お願いいたします。また、質問内容は家単位でどうであったか、またはどのようにお考えかという質問ですので、可能な限りお年寄りや、若い方も含めて話し合いながら、お答えいただけたら幸いです。

世代で異なった意見があれば具体的にご記入ください。貴重な情報となります。

・現在の家族構成を教えてください。□にチェックを入れて年齢を書き込んでください。年齢は実年齢あるいは「50代前半」といった表現でも結構です。

- 曾祖父() 曾祖母() 祖父() 祖母()
父() 母() 成人女性同居人() 同男性同居人()
男子() 男子() 男子()
女子() 女子() 女子()

・過去に能を習った、あるいは現在習っている人があれば、上の家族構成に対応させ、何才頃から何才まで習ったかを記入してください。続けている場合は～で終わってください。(例

女子(10～) 女子(9～12))

- 曾祖父() 曾祖母() 祖父() 祖母()
父() 母() 成人女性同居人() 同男性同居人()
男子() 男子() 男子()
女子() 女子() 女子()

・現在、能以外にも伝統芸能を習っている方がおられましたら教えてください。

(例 祖母 小唄をやっている(56～)

()

・既にご他界されたご家族の方で能を習っていた方、または愛好されていた方がおられましたら教えてください。(例 曾祖父 謡 昭和 20 年～昭和 50 年頃)

()

・ご家庭にテレビがはじめて入った時期は何時頃でしょうか、イベントと関連づけても結構です。(例 1970 年頃 東京オリンピックの頃、大阪万博の頃)

()

・昨年 6 月 2 日に小泊白山神社能舞台修復工事完成こけら落とし記念薪能、さらに 11 月 3 日に奉納舞囃子がありましたが、これらをご覧になりましたか。

ご覧になられた場合、チェックをいれてください。

6 月 2 日 11 月 3 日

・無料で受けられる笛講座を能舞台で 6 月から開始しましたがご存知でしたか。

はい いいえ

・上記の笛の講座に参加したいと思いますか。

はい いいえ

・「地域おこしチャレンジ事業」の経費で公民館にて大鼓の稽古を行っていますが、ご存知でしたか。

はい いいえ

・無料で能の楽器や謡を習ってみたいですか。

はい いいえ

・「はい」と答えた方はどれを習ってみたいですか。

笛 大鼓 小鼓 太鼓 謡 仕舞

・能舞台を演能以外で使用された例をご存知ですか。小泊以外の例も含めます。

はい いいえ

・ 「はい」と答えた方は、具体例を記入してください。

(例：〇〇神社能舞台では合唱コンクールを地元の中学校が定期的に行っている)

()

・能舞台を演能以外で使いたいですか。

はい いいえ

・「はい」答えた方へ、どんなことで利活用したいですか。

()

・伝統芸能によって地域が活性化すると思いますか。

はい いいえ

・「はい」と答えた方へ、どのようにすれば活性化すると思いますか。

()

・「いいえ」と答えた方へ、なぜ活性化しないと思いますか。

()

・現在あるいは過去に能で使われる楽器、道具等がご自宅にありましたか。

はい いいえ

・「はい」と答えた場合、現在ですか?過去にあった物ですか?

現在 過去(亡くなったご家族から聞いたことも含める)

・何がありますか、あるいはありましたか?

楽器(笛、小鼓、大鼓、太鼓)、謡本、能衣装、その他(具体的に)

()

・現在ない場合はどのようにしましたか?

能楽をされる方に譲った 処分(廃棄)した その他(具体的に)

()

・その他能楽等伝統芸能や能舞台にかかわらず集落を活性化できるアイデアがありましたら記述してください。

()

ご協力ありがとうございました。